

## 海外宣教師と日本人キリスト者における慈善活動に関する一考察

——米国聖公会宣教師ウイリアムズの諸活動と慈善事業家石井亮一の生涯を通して——

社会福祉学専攻 深山 鷹一

### 要 旨

本稿の目的は、海外宣教師の慈善事業と、キリスト教に帰依した日本人の慈善事業の共通点と相違点について文献を用いて実証的に論考することにある。具体的には、米国から派遣され日本で医療事業・教育事業を日本で導入し、晩年においては孤児院への支援を行ったウイリアムズと、知的障がい者福祉を切り開いた石井亮一の人生における実践と語りと比較・検討した。

最初に石井亮一とウイリアムズが活躍した、明治～昭和初期の救済に関する時代背景についてまとめた。大政奉還後、幕府の影響を払拭するために、天皇への権力を増強しようと政府の要人によって天皇慈恵主義を意図的に作られていった。そのため天皇・皇族からの恩賜として医療事業や慈善事業への御下賜金を支出したが、滝乃川学園もこの天皇の御下賜金の対象となった。恩賜金は活動へのお墨付きが貰えたことでもあるため、滝乃川学園が現在も続く福祉活動として繋がったといえよう。

ウイリアムズは米国聖公会の宣教師として、日本のキリスト教布教禁止の高札を取り去るために米国本国から外圧を掛けるように依頼したり、長崎・大坂・東京と様々な地域で宣教のために教育・医療・慈善活動を行った。慈善事業を行うための資金を米国の教会から献金として集めたり、米国からの人材を充てたりして、日本において慈善活動をする基盤を作っていたと考えられる。

亮一はウイリアムズから女子教育の指導者になるきっかけを得て、教育者となり濃尾地震での女子の処遇の酷さに心を痛め、女子のための孤児院を建てた。そこで、一人の知的障がい児と出会い、知的障がい者支援の道に生涯を捧げた。ウイリアムズは宣教することを一つの目的に日本で教育・医療活動に取り組んだのに対して、石井亮一は子どもたちから教えられながら、目の前の子どもに向き合うこと自身を目的とした。

お互いに慈善活動を行おうとする思いと信仰は共通点としてあったが、主に宣教を目的として日本で活動を開始し、慈善活動の基盤を作ったウイリアムズと、目の前の子どもにしっかりと向き合った亮一における慈善活動に関する関わりの相違点である。そしてこの亮一の目の前のうめき声を聞き取るまなざしの大切さと、ウイリアムズのように大局的な視点から経済的に支えた支援者と協働したからこそ、慈善事業が展開し、良い実践が現在にも継承されていると考える。